

とせり)

の歌あり、また萬代集雜四に、「宋朝に入て侍ける日よみ侍ける」とて戒覺上人の歌をのせ、その次にこれももろこしにてよめる(一本よみける)

慶 政 上 人

思ひきや虎ふす野べと聞おきし唐國寒き旅ねせんとは

の歌の如きは、之を證して餘ありといふべし。

明惠上人が佛道に歸依すること、深く、延いて印度を慕ひ、ついに元久二年出遊の壯圖を企て、その行程、地理を研究するが如きに至りしことは、有名なる事實にして、能く慶政が記するところと合す、而して更に之を兩者相互の歌、例へば續古今集卷十六哀傷歌の部に、「月の夜高辨上人の許にまかりて、發心の始の事など互に申して侍けるに、身まかりて後、そのかみのものがたり思ひ出で、かの月日に當りける時よみ侍ける」とて、「めぐり逢ふ昔がたりの秋の月なぐさめかねる我が心かな」といへるが如き、その他千載集釋教歌の中に載する歌の如きに鑒むれば、その交りの殊に深かりしを推すに足るべし、されば慶政が鎌倉時代の初葉に出で、山城松尾の法華山寺に居り、その當時の歌人及び高僧等と交りを重ね、自からも亦歌をよくし、壯時佛道研究の爲に入宋して、嘉定十年の頃彼土にあり、歸來文永五年の頃寂せし僧なるべしとは、上に記する所によりて知り得る所なりとす。

文書に記せる外國文字が、波斯文なることは先きにいへるが如し、今之を音譯し、及び解釋すれば次の如し。

(Iは文書上方の四行IIは下方の四行なり)

日本に傳はる波斯文に就て